

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 6 日現在

機関番号：35414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463387

研究課題名(和文) 災害看護を行う看護者への支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the program to support disaster relief nurses

## 研究代表者

中信 利恵子 (Nakanobu, Rieko)

日本赤十字広島看護大学・看護学部・教授

研究者番号：40341242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：過去約10年間に災害看護を行った経験がある看護者に質問紙調査を行い、前回調査との比較、対象者の教育背景による比較を行った。赤十字教育施設の出身者が17.8%、赤十字以外の教育施設出身者が80.9%であった。看護者は前回調査同様な災害看護活動を行っていた。災害看護の体験は2項目、看護者が受けた影響は1項目、災害看護体験の意味づけは2項目、災害看護の経験は9項目、看護者が捉えた災害看護を行う看護者への支援は8項目の平均値が高かった。前回調査と比較した結果、平均値が高い項目がほぼ同様の結果であった。看護者の教育背景の違いと看護者に及ぼす影響及び影響要因を比較した結果、ほぼ同様の影響を受けていた。

研究成果の概要(英文)：We conducted a questionnaire survey of nurses who experienced disaster nursing (DN) in the past 10 years or so, and compared results with those of a previous survey and according to educational background. Among the participants, 17.8% were from Japanese Red Cross Nursing Schools, and 80.9% were from other educational institutions. Nurses performed DN activities similar to those reported in the previous survey. Two items relating to DN experience, 1 item relating to effects on nurses, 2 items relating to meanings attached to disaster nursing experience, 9 items related to previous DN experiences, and 8 items relating to support for disaster nurses as perceived by nurses had high mean scores. A comparison with previous survey results revealed that similar items had high mean scores. With respect to effects on nurses and underlying factors, comparisons based on differences in nurses' educational background revealed that all nurses were similarly affected by DN activities.

研究分野：災害看護学

キーワード：災害看護 看護者の体験 看護者が受ける影響 体験の意味づけ 災害看護を行う看護者への支援

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 災害時に看護活動を行う看護者は、自ら負傷をしていても、家族を失っていても、他者の心身のケアに携わることが求められる場合がある。これまでは、災害時に看護活動を行う看護者自身の苦痛、苦悩などの体験は、看護者自身が個人的に背負わざるを得ない状況にあった。海外においては、1970年代からこうした現象が指摘されている。日本では、1995年の阪神・淡路大震災を契機に、災害時の救援・救護活動、看護活動が救援者の心身に影響を与えることやストレスの問題などの「隠れた被災者」の問題が認識されるようになってきた。しかし、支援方法については体系的に確立されていない。災害看護活動を行なうことが、看護者にどのような影響を及ぼしているのか、看護者にとってどのような支援のニーズがあるのかを見出し、看護者への支援方法を体系化していく必要があると考えた。研究者は、看護者が行っている災害看護活動、災害看護の体験、看護者が受けている影響及び影響要因、看護体験の意味づけ、看護者の認識している経験を明らかにし、看護者への支援方法の体系化を目指すことを目的として「災害看護を行う看護者への支援方法の体系化-災害看護の体験が看護者に及ぼす影響と災害看護の体験の意味づけを通して-」をテーマに研究を行った(中信2009, 中信2011)。この研究では、赤十字関連の教育施設出身者かどうかや赤十字に関する研修等を受けているかどうかで、災害看護活動や体験に違いが見られた。そこで、この研究の成果を発展させるために、赤十字以外の病院組織に所属する看護者に調査を行い、比較・分析していくこと、国内と国外での災害看護活動や体験について比較・分析することで、新たな視点が見出される可能性があると考えた。

(2) 本研究で着目した災害看護の体験が看護者に及ぼす影響と、災害看護の体験の意味づけという視点で捉えた看護者への支援は、新たな視点で捉えた支援である。特に災害サイクルの各期に応じた、看護者の身体的・精神的・社会的影響及び生活への影響を考慮した支援、看護者が災害看護の体験を意味づけるプロセスにおいて、肯定的な意味づけとなるように支援することを視点とした支援方法を体系化できた研究はこれまでになく、本研究の独創的な点である。「看護者への支援プログラム」によって、看護者が災害看護の体験を肯定的に意味づけることを促進し、次の災害看護活動に向かう意欲の向上、充実した看護活動の実践に繋がり、ひいては災害看護の質の向上に貢献できる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護者が行っている災害看護活動、災害看護の体験、看護者が受けている影響及び影響要因、看護体験の意味づけ、

看護者の認識している経験を明らかにし、「看護者への支援プログラム」を開発することである。

## 3. 研究の方法

(1) 研究デザインは関係探索研究デザインである。前回の調査において、文献検討及び面接調査に基づいて質問紙を作成し、パイロットテストで妥当性を査定し作成した質問紙を基に、質問項目をさらに洗練化しデータ収集を行った。調査内容は、個人特性、看護者が行った災害看護活動、災害看護の体験(7項目)・看護者が受けている影響(19項目)および影響要因(7項目)・看護体験の意味づけ(5項目)・看護者が認識している経験(9項目)・看護者への支援に関する質問(10項目)である。質問項目は5段階評定(-2~2)とした。

(2) 研究対象者は過去約10年間に国内や国外で災害看護活動を行った経験があり、研究協力の同意が得られた者とした。研究対象者の選定は、全国の災害拠点病院(赤十字病院含む)で医療に従事している看護者に研究への協力を依頼した

(3) データは統計学的な分析方法で、記述統計量を算出した。

(4) 本調査は日本赤十字広島看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

## 4. 研究成果

(1) 研究協力の承諾を得た赤十字病院36施設に計882部、赤十字以外の災害拠点病院38施設に計252部、質問紙を郵送した。質問紙の回収率は59.8%(678名)、有効回答率は99.7%(676名)であった。看護者の平均年齢45.6歳(SD:7.85)、男性11.1%(76名)、女性87.3%(598名)であった。教育背景のうち、赤十字教育施設出身者(以下、赤十字出身者と略す)が17.8%(122名)、赤十字以外の教育施設出身者(以下、他施設出身者と略す)が80.9%(554名)であった。看護経験年数は15~20年未満が66.1%(447名)、5~10年未満が14.9%(101名)、10~15年未満が13.5%(91名)であった。5段階尺度(-2~2)のうち1以上(ややそうである、全くそうである)のものを「平均値が高い」とした。

### (2) 看護者が行った災害看護活動

看護者が災害看護活動を行った災害の種類は、地震(80.2%)が最も多く、次に津波(26.8%)、集中豪雨(7.5%)、洪水(5.0%)であった。前回調査では、地震(86.8%)、集中豪雨(16.5%)、火山噴火(6.9%)、洪水(5.9%)であり、いずれもほとんどの看護者が地震時の災害看護活動を行っていた(図1)。今回の調査は、東日本大震災後の調

査であり、津波の災害時に活動を行った看護師が多いという特徴があった。看護師の災害看護活動の活動期間は、3日(24.8%)、5日(22.3%)、4日(13.1%)、1日(9.9%)、2日(9.2%)、7日(8.2%)、10日(5.2%)で、最大が10日であった。看護師のほとんどが3日~5日間の活動であった。

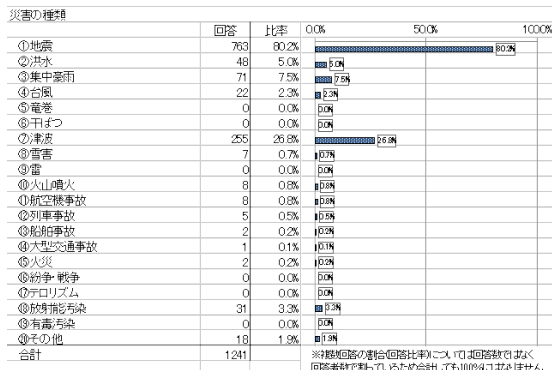


図1 看護師が看護活動を行った災害の種類

看護師が行った災害看護活動は、割合の多い順に「血圧測定(79.6%)」、「被災者と話す(78.0%)」、「巡回診療の介助(54.9%)」、「他の医療チームの救援者と情報交換(53.2%)」、「傷病者の創傷処置(44.8%)」、「被災者のこころのケア(43.1%)」、「チームメンバー間のコミュニケーション(41.2%)」などであった(図2)。前回調査は「血圧測定(78.1%)」、「被災者と話す(75.1%)」、「診療所での診察介助(57.9%)」、「巡回診療の介助(55.9%)」、「与薬(46.9%)」、「傷病者の創傷処置(41.3%)」、「被災者の精神面へのケア(31.6%)」、「被災者へのこころのケア(31.2%)」、「チームメンバー間のコミュニケーション(M:1.69,SD:0.58)」、「他の医療チームの救援者と情報交換(M:1.11,SD:0.98)」であった。いずれも8割近くの看護師が「血圧測定」、「被災者と話す」を行っていた。

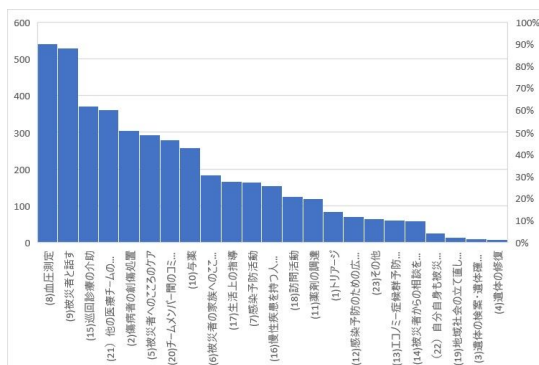


図2 看護師が行った災害看護活動

### (3) 看護師の災害看護の体験

看護師の災害看護の体験(7項目)のうち、次の2項目の平均値が1以上であった(図3)。「他の医療チームとの連携の重要性を感じた(M:1.66,SD:0.66)」、「使命感を持って活

動できた(M:1.41,SD:0.75)」。一方、「活動によって被災者がよい方向に変化するのを見ることができ、達成感があった(M:-0.01,SD:0.98)」は平均値が0以下で、「どちらともいえない」の回答者が41.6%を占めていた。

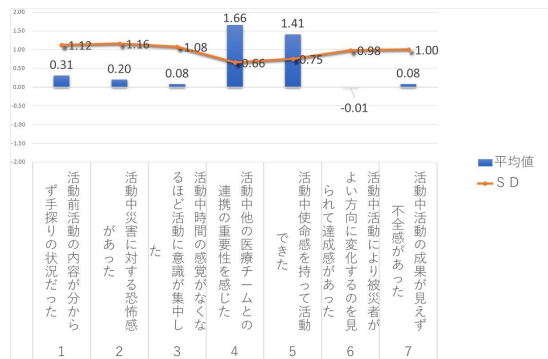


図3 看護師の災害看護の体験

前回調査と比較した結果、平均値が1以上の項目がほぼ一致していた。しかし、「活動中時間の感覚がなくなるほど活動に意識が集中した(M:0.08,SD:1.08)」は、前回調査(M:0.98,SD:0.88)に比べて、平均値が0.90低かった。また、「活動中被災者がよい方向に変化するのを見られて達成感があった(M:-0.01,SD:0.98)」は、前回調査(M:0.58,SD:0.98)に比べて、平均値が0.54低かった。さらに、赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行った(表1)。平均値に差があり、ばらつきのある項目は、「活動前に活動内容が分からず手探りの状況だった(p<.05)」で、赤十字出身者(M:0.02)、他施設出身者(M:0.37)であった。

表1 看護師の災害看護の体験(赤十字出身者と他施設出身者): 平均値の差

	等分散性のためのLeveneの検定		2つの平均値の差の検定		F値 有意水準	t値 有意水準		
	F値	有意水準	t値	自由度(両側)			平均値の差	
1.活動前活動の内容が分からず手探りの状況だった	0.003	0.953	3.19	180,211	0.002	0.354	n.s.	**
2.活動中被災者に対する恐怖感が多かった	0.352	0.553	1.589	172,429	0.114	0.189	n.s.	n.s.
3.活動中活動に意識が集中した	1.072	0.301	0.3	169,818	0.784	0.034	n.s.	n.s.
4.活動中他の医療チームとの連携の意識を感じた	1.584	0.209	-0.8	168,958	0.425	-0.05	n.s.	n.s.
5.人達・物達の精神、使命感を持って活動できた	0.587	0.452	0.019	187,123	0.985	0.001	n.s.	n.s.
6.活動中活動により被災者がよい方向に変化するのを見られて達成感があった	0.111	0.739	0.177	176,213	0.859	0.018	n.s.	n.s.
7.活動中活動の成果が見えず不達成感があった	3.948	0.047	1.084	870	0.275	0.11	*	n.s.

(4) 災害や災害看護が看護師に及ぼす影響  
災害や災害看護の体験が看護師に及ぼす影響(19項目)は、すべての項目の平均値が1以上であった(図4)。「災害看護活動中、現場の被災状況を見て衝撃を受けた(M:4.54,SD:0.82)」は平均値が高くばらつきが小さかった。この項目は前回調査と同様の結果であった。「災害看護活動中、緊張感が強かった」は、被災体験のある人(M:4.05,SD:0.85)の方が、被災体験のない人(M:3.94,SD:0.93)よりも、平均値が高くばらつきも小さかった。「現在も災害看護活

動による影響である心身の疲労感が続いている(1.35,SD:0.71)、「現在も災害看護活動による影響である緊張感が続いている(1.25,SD:0.62)」、「現在も災害看護活動による影響で夜眠れないことがある(1.14,SD:0.44)」、「現在も災害看護の体験を思い出し辛いと感じることが続いている(1.65,SD:0.94)」は平均値が低く、ばらつきが小さかった。これらの項目は前回調査と同様の結果であった。

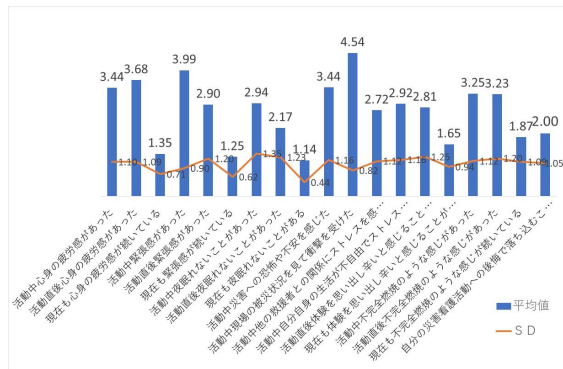


図4 災害や災害看護が看護者に及ぼす影響

さらに、赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行った(表2)。平均値に差があり、ばらつきがある項目は「災害看護活動中夜眠れないことがあった(p<.05)」で赤十字出身者(M:0.12)、他施設出身者(M:-0.22)であった。「現在も災害看護活動の影響で夜眠れないことがある」は赤十字出身者(M:-1.89)、他施設出身者(M:-1.84)で平均値の差がなくばらつきが少なかった。「災害看護活動中、現場の被災状況を見て衝撃を受けた」は赤十字出身者(M:1.40)で他施設出身者(M:1.46)と、いずれも平均値が1以上で両者に差はなく、両者に影響していた。両者のデータに差がある項目「活動中夜眠れないことがあった」は平均値が1未満でばらつきがあり個別性が推測される。看護者の教育的背景(出身教育施設)の違いと看護者に及ぼす影響を比較した結果、両者の違いはほぼみられず、看護者は同様の影響を受けていたといえる。

表2 災害看護の看護者への影響(赤十字出身者と他施設出身者):平均値の差

	等分散性のためのLeveneの検定		2つの母平均の値の検定				F値 有意水準	t値 有意水準
	F値	有意水準	t値	自由度	有意水準 (両側)	平均値 の差		
1.活動中心身の疲労感が続いた	0.029	0.864	-0.521	177.807	0.603	-0.027	n.s.	n.s.
2.現在も心身の疲労感が続いている	0.18	0.67	-0.889	178.755	0.37	-0.086	n.s.	n.s.
3.現在も心身の疲労感が続いている	3.21	0.074	0.882	201.404	0.373	0.056	n.s.	n.s.
4.活動中夜眠れないことがあった	0	0.989	-0.275	181.34	0.783	-0.025	n.s.	n.s.
5.活動中夜眠れないことがあった	0	0.989	-0.568	178.43	0.571	-0.069	n.s.	n.s.
6.現在も災害看護活動が十分でないと感じる	1.952	0.163	0.789	183.959	0.431	0.045	n.s.	n.s.
7.活動中夜眠れないことがあった	0.718	0.398	-2.92	181.854	0.01	-0.345	n.s.	*
8.活動中夜眠れないことがあった	3.178	0.076	-1.748	171.859	0.082	-0.221	n.s.	n.s.
9.現在も夜眠れないことがある	6.019	0.014	1.202	871	0.23	0.055	n.s.	n.s.
10.活動中夜眠れないことがあった	0.019	0.881	-0.215	179.315	0.83	-0.026	n.s.	n.s.
11.活動中現場の被災状況を見て衝撃を受けた	1.378	0.241	0.624	165.347	0.533	0.061	n.s.	n.s.
12.活動中現場の被災状況を見て衝撃を受けた	1.54	0.215	0.71	186.883	0.479	0.077	n.s.	n.s.
13.活動中現場の被災状況を見て衝撃を受けた	0.11	0.74	-1.504	181.506	0.134	-0.171	n.s.	n.s.
14.活動中現場の被災状況を見て衝撃を受けた	1.803	0.18	-1.098	170.663	0.274	-0.145	n.s.	n.s.
15.現在も体験を思い出し辛いと感じることが続いている	0.381	0.537	0.989	178.384	0.319	0.093	n.s.	n.s.
16.活動中不完全な業務のような感じがあった	1.387	0.239	1.064	186.618	0.289	0.115	n.s.	n.s.
17.活動中不完全な業務のような感じがあった	0.703	0.402	0.558	187.111	0.577	0.064	n.s.	n.s.
18.現在も不完全な業務のような感じがあった	1.987	0.158	1.736	186.803	0.084	0.176	n.s.	n.s.
19.自分の災害看護活動への後悔で夜眠れないことがある	0.314	0.578	0.282	179.778	0.794	0.027	n.s.	n.s.

\*:p<.05 n.s.:有意差なし

(5) 看護者の災害看護の体験の意味づけ  
看護者の災害看護の体験の意味づけ(5項目)のうち、2項目の平均値が1以上であった(図5)。「災害看護の使命感が湧く体験だった(M:1.07,SD:0.87)」、「自分の知識・技術を高めようという向上心を刺激する体験だった(M:1.01,SD:0.90)」。また、「災害看護活動が十分にできなかった、情けない思いがある(M:-0.31,SD:1.17)」、「災害看護活動に対する後悔の気持ちがある(M:-0.92,SD:1.05)」は平均値が0以下でばらつきが大きかった。

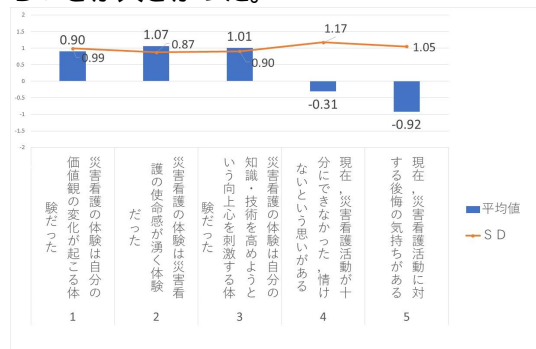


図5 看護者の災害看護の体験の意味づけ

前回調査と比較した結果、平均値が1以上の項目がほぼ一致しており、同様の結果を示していた。看護者は災害看護活動において、使命感や向上心への刺激を受ける体験をし、肯定的な意味づけをしていた。また、看護者がチームとしてサポートをしあえる人間関係を築き、役割を明確にして連携していくことが重要であると意味づけしていた。さらに、災害看護活動の不全感や後悔の気持ちを持つ人は少ない傾向にあったが、ばらつきがあったことも前回調査と同様の結果だった。災害看護活動の不全感や後悔ではなく、達成感が持てるような支援の必要性が示唆された。赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行った(表3)。平均値に差があり、ばらつきがある項目は「現在、災害看護活動が十分にできなかった、情けない思いがある(p<.05)」で赤十字出身者(M:-0.52)、他施設出身者(M:-0.26)であった。いずれも平均値が0以下でばらつきがあり、個別性が推測されるが、他施設出身者の方が、活動が十分にできず情けない思いをした看護者がいた傾向が考えられる。

表3 看護者の災害看護の体験の意味づけ

(赤十字出身者と他施設出身者):平均値の差

	等分散性のためのLeveneの検定		2つの母平均の値の検定				F値 有意水準	t値 有意水準
	F値	有意水準	t値	自由度	有意水準 (両側)	平均値 の差		
1.災害看護の体験は自分の価値観の変化が起こる体験だった	0.031	0.861	0.982	189.635	0.327	0.082	n.s.	n.s.
2.災害看護の体験は災害看護の使命感が湧く体験だった	0.017	0.897	0.459	180.247	0.647	0.04	n.s.	n.s.
3.災害看護の体験は自分の知識・技術を高めようという向上心を刺激する体験だった	0.098	0.755	0.232	180.083	0.817	0.021	n.s.	n.s.
4.現在、災害看護活動が十分にできなかった、情けない思いがある	1.47	0.226	2.276	188.513	0.024	0.254	n.s.	*
5.現在、災害看護活動に対する後悔の気持ちがある	1.73	0.189	0.731	187.45	0.466	0.073	n.s.	n.s.

\*:p<.05 n.s.:有意差なし

### (6) 看護者の災害看護の経験

看護者が捉えた災害看護の経験(9項目)は、すべての項目で平均値が1以上であった(図6)。順に「チーム内の人間関係の形成が重要である(M:1.71,SD:0.52)」、「事前に打ち合わせや役割分担を明確にすることが重要である(M:1.54,SD:0.66)」、「周りをサポートすることが重要である(M:1.50,SD:0.63)」であった。赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行ったが、平均値に差のある項目はなかった。

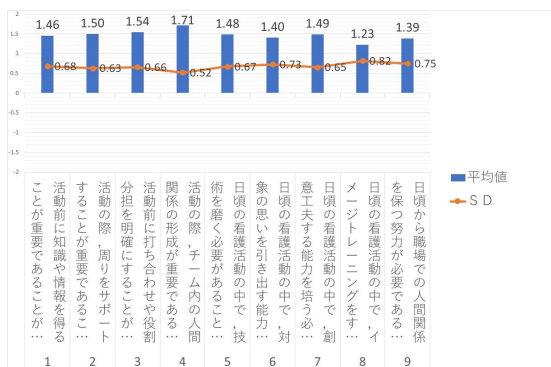


図6 看護者の災害看護の経験

前回調査と比較した結果、平均値が1以上の項目がほぼ一致しており、同様の結果を示していた。看護者は災害看護活動において、使命感や向上心への刺激を受ける体験をし、肯定的な意味づけをしていた。また、看護者がチームとしてサポートをしあえる人間関係を築き、役割を明確にして連携していくことが重要であると意味づけていた。さらに、災害看護活動の不全感や後悔の気持ちを持つ人は少ない傾向にあったが、ばらつきがあったことも前回調査と同様の結果だった。災害看護活動の不全感や後悔ではなく、達成感が持てるような支援の必要性が示唆された。

### (7) 災害看護を行う看護者に及ぼす影響要因

災害看護を行う看護者に及ぼす影響要因(7項目)の平均値が1以上の項目はなかった(図7)。平均値が高い順に「災害看護活動の前に頑張らなければならないという気負いの気持ちがあった(M:0.86,SD:1.05)」、「災害現場で活動前に活動への不安があった(M:0.73,SD:1.17)」、「活動中被災者に援助したくても何も援助できない状況であった(M:0.37,SD:1.22)」等であった。前回調査と比較したところ、「活動中遺体など悲惨な現場を目のあたりにして現実かと疑う思いをした(M:-0.23,SD:1.48)」が、前回調査(M:-0.81,SD:1.39)に比べて、平均値が0.58高かった。また、「活動中被災者に援助したくても何も援助できない状況であった(M:0.37,SD:1.22)」が、前回調査(M:-0.14,SD:1.26)に比べて、平均値が0.51高かった。

赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行った。平均値が高かったのは「災害現場で活動前に活動への不安があった」赤十字出身者(M:0.80)、他施設出身者(M:0.71)であり、活動前の不安という影響要因は両者に見られたといえる。平均値が-1未満の項目は「活動中他の救援者の何気ない言葉に傷ついた」赤十字出身者(M:-1.14)、他施設出身者(M:-1.09)であった。平均値に差がある項目はなかった。

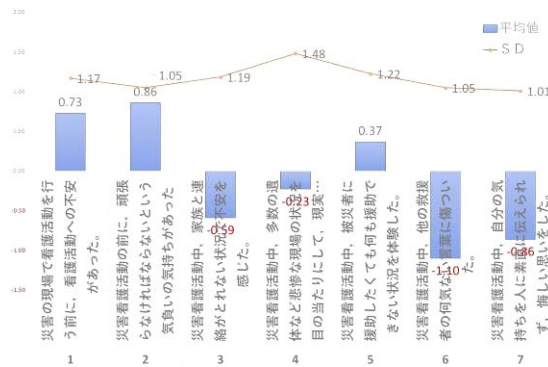


図7 災害看護を行う看護者に及ぼす影響要因

### (8) 看護者が認識した看護者への支援

看護者が捉えた災害看護を行う看護者への支援(10項目)のうち、8項目の平均値が高かった(図8)。順に「活動中チームリーダーが話しやすい雰囲気を作り、気持ちを素直に言える場があるとよい(M:1.64,SD:0.57)」、「活動中チームメンバー間で活動を振り返る機会を持るとよい(M:1.53,SD:0.67)」、「活動前から活動後まで看護者の精神面への支援が必要である(M:1.42,SD:0.70)」などであった。2項目の平均値は中程度でばらつきが大きかった。「活動後の慰労会やチームメンバーでの打ち上げがあると自分の思いが発散できる(M:0.84,SD:1.11)」、「活動中に被災者が救援者である自分たちに感謝や励ましの言葉をかけてくれたとしたら嬉しい(M:0.65,SD:1.15)」であった。

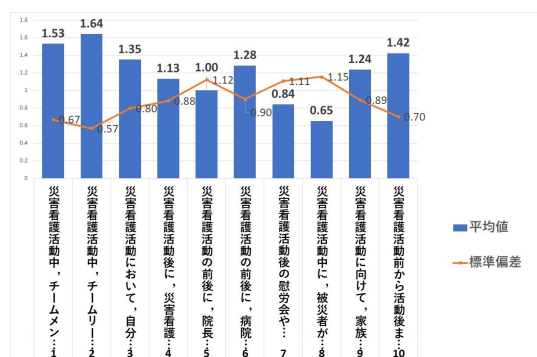


図8 看護者が認識した看護者への支援

前回調査と比較した結果、ほとんどの項目の平均値が高いもしくは中程度で平均値の低い項目がないことがほぼ一致し、同様の結果であった。看護者は活動を振り返ること、

気持ちを言い合えることが重要と捉えていた。「活動中に被災者が救援者である自分たちに感謝や励ましの言葉をかけてくれたとしたら嬉しい」については、ばらつきが大きく、あえて求めてないという意識が推察される。災害看護の活動前から後まで、看護者が気持ちを話し合う、他者からの励ましや精神面の支援を受ける等の必要性が示唆された。さらに、赤十字出身者と他施設出身者との間で、F検定とt検定を用いて比較を行った(表4)。平均値に差があり、ばらつきがあった項目は「災害看護活動に向けて家族が自分を励まして送り出してくれると嬉しい(p<.05)」で赤十字出身者(M:1.08)、他施設出身者(M:1.27)で、他施設出身者の方がより家族からの励ましが支援になると捉えていたといえる。

表4 看護者が認識した看護者への支援

(赤十字出身者と他施設出身者): 平均値の差

	等分散性のためのLeveneの検定		2つの母平均の差の検定				F値 有意水準	t値 有意水準
	F値	有意水準	t値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差		
1.災害看護活動中、チームメンバー間で距離を縮め合い助け合いを待てるとよい	0.102	0.75	-0.214	184.166	0.831	-0.014	n.s.	n.s.
2.災害看護活動中、チームリーダーが話しやすい雰囲気を作り、気持ちを楽にできる場が多くなるとよい	0.025	0.876	-0.325	177.385	0.746	-0.019	n.s.	n.s.
3.災害看護活動において、自分が行った活動を他者に認められると嬉しい	0.089	0.793	-1.325	181.226	0.187	-0.104	n.s.	n.s.
4.災害看護活動後に、災害看護体験について語りあつたりまとまりがあるがあると、自分の思いが伝わる	0.052	0.82	-0.962	172.795	0.337	-0.088	n.s.	n.s.
5.災害看護活動の前後に、院長や看護部長が送り出しや出迎えをしてくれると嬉しい	1.868	0.197	1.09	167.969	0.277	0.13	n.s.	n.s.
6.災害看護活動の時に、病院のスタッフに感謝しやねぎらいの言葉をかけてもらえる	0.229	0.633	1.305	167.919	0.194	0.125	n.s.	n.s.
7.災害看護活動後の反省会やチームメンバーでの打ち上げがある、自分の思いが伝わる	0.192	0.661	0.594	180.443	0.553	0.065	n.s.	n.s.
8.災害看護活動中に、被災者が救援者である自分たちに感謝や励ましの言葉をかけてくれたと嬉しい	0.441	0.507	1.398	183.98	0.164	0.157	n.s.	n.s.
9.災害看護活動に向けて、家族が自分を励まして送り出してくれると嬉しい	0.086	0.769	2.093	175.891	0.038	0.189	n.s.	*
10.災害看護活動から活動後まで、看護者の精神面への支援が必要である	0.285	0.593	-0.879	177.431	0.381	-0.062	n.s.	n.s.

\*:p<.05 n.s.:有意水準なし

(9) 前回調査と比較した結果、平均値が1以上の項目が一致している項目がほとんどで同様の結果を示していた。看護者は災害看護活動において、使命感や向上心への刺激を受ける体験をし、肯定的な意味づけをしていた。また、看護者がチームとしてサポートをしあえる人間関係を築き、役割を明確にして連携していくことが重要であると意味づけしていた。さらに、災害看護活動の不全感や後悔の気持ちを持つ人は少ない傾向にあったが、ばらつきがあったことも前回調査と同様の結果だった。災害看護活動の不全感や後悔ではなく、達成感が持てるような支援の必要性が示唆された。

これまでの記述統計量を算出しての分析を行い、前回調査との比較を行ったが、前回調査との共通点が多く新たな視点は明確にはなっていない。今後、各種多変量解析手法による多角的なデータ分析を行い、さらに相違点を明らかにし、前回調査(中信,2011)で看護者の支援に関わる人、災害静穏期・準備期における看護者への支援、災害看護活動参加決定後(活動前)の看護者への

支援、災害看護活動中の看護者への支援、災害看護活動直後の看護者への支援、災害看護活動後の看護者への支援という観点で見出した「看護者への支援」の内容の検討を重ね、精選し、「看護者への支援プログラム」を明らかにする。

#### <引用文献>

中信利恵子, 山田覚(2009). 災害看護の体験が看護者に及ぼす影響と体験の意味づけ, 日本災害看護学会誌, 11(2), 43-58.  
 中信利恵子(2011). 災害看護を行う看護者への支援方法の体系化 災害看護の体験が看護者に及ぼす影響と災害看護の体験の意味づけを通して, 高知県立大学健康生活科学研究科博士後期課程 博士論文.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(学会発表)(計5件)

Nakanobu, R., Yamada, S. (2016). Identifying the Effects of Nurses' Stress from Experiences in Disaster Relief Nursing - Compared with Previous Survey of the Great East Japan Earthquake-, The 4th Academic Conference of World Society of Disaster Nursing 2016, Jakarta, Indonesia.

中信利恵子, 山田覚(2017). 看護者の災害看護の体験と体験の意味づけおよび看護者の認識した経験 - 東日本大震災後の質問紙調査 - . 日本災害看護学会第19回年次大会, 倉吉市.

中信利恵子, 山田覚(2017). 看護者が捉えた災害看護を行う看護者への支援 - 東日本大震災後の質問紙調査 - . 第37回日本看護科学学会学術集会, 仙台市.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中信 利恵子 (NAKANOBU, Rieko)  
 日本赤十字広島看護大学・看護学部・教授  
 研究者番号: 40341242

##### (2) 研究分担者

山田 覚 (Yamada, Satoru)  
 高知県立大学・看護学部・教授  
 研究者番号: 70322378